

ジョクジャカルタと文化ツーリズム

イ・マデ・バンデム

(林 稔子 訳)

要 旨

インドネシアのツーリズムを語る時、ジョクジャカルタの名前を出すことを避けることはできない。ジョクジャカルタはそれほど重要な都市なのだろうか？あるいは、もっと専門家らしく問いかけてみよう。ジョクジャカルタではなぜツーリズムが栄え、観光客の目的地として興味ある場所になっているのか？

この問いをまず提起し、次いでその長所や弱点を知ること。そして、ジョクジャカルタのもつ様々な利点と直面している脅威を論じることによって、この都市のツーリズムを発展させるために、どのような文化政策が望ましいのか提案してみたいと思う。

キーワード：文化ツーリズム， ツーリズム・プロモーション， 文化政策

1. 強さ（潜在力）

ジョクジャカルタは、ある意味で他のインドネシア諸都市がもっていない潜在力に富んでいる。4つの郡と1つの市から成り立っていること（スレマン郡、バントゥル郡、グヌン・キドゥル郡、クロン・プロゴ郡とジョクジャカルタ市）、そして特に大学に代表される学生の都市、文化の都市（ジャワ文化の中心）、あるいは闘争の都市という点で、抜きん出ている。そして今では、インドネシアへの観光客の最終目的地として知られている。こういった別名の数々は、ジョクジャカルタに特別な社会的、文化的、政治的背景が存在することを物語るものであり、その実、インドネシア全体がそうだとはいえるのである。

1997年の政治・経済危機以前には、ジョクジャカルタへは毎年、海外から35万人、国内から70万人もの観光客が押し寄せていた。それが

危機の後、海外観光客7万人、国内観光客35万人に激減してしまった。ジョクジャカルタが観光客を引きつけていたのは、この都市と周辺地域がもつ文化的潜在力によるものであった。すなわち（a）ジョクジャカルタのクラトン（王宮）。それはジャワの文化のセンター、養成所として今日でも強い存在感をもっている。王と芸術の大家たちは夥しい芸術作品（文芸ならびに芸能）を創造し、それらは今日までよく保持されている。ジョクジャカルタ・ハディニングラット王宮はまた博物館をもっており、王宮の博物館としてはインドネシアに他に並ぶものがない。この博物館は歴代の王の時代に造られた考古学的な遺物の完全なコレクションを有しており、彼らの偉大さを表現しているのである。

（b）こういった潜在力は、カソングン、クレベット、ウォノギリ、グヌン・キドゥルの村々といった周辺地域の工芸村によって支えられている。（c）民俗芸能や美術の潜在力もまたジョ

クジャカルタに寄り添っている。仮面舞踊、ドララッ、クダ・ルンピンというような種々の芸能がジョクジャカルタの村々に広がり、ツーリストの関心を確実に引いている。ISI ジョクジャカルタ（インドネシア芸術大学は、美術系の高等教育機関 STSRI『ASRI』、舞踊アカデミー『ASTI』、音楽アカデミー『AMI』の統合体である）の設立は、多くの不朽の芸術作品を創造する卓越した芸術家を生み出している。彼らは次の世代の芸術家のモデルにもなっている。（d）美術アトリエ、舞踊教室、音楽教室、「カラウィタン」教室などが民間の教育センターにあり、芸術家を育成する場として継続的に機能している。このなかには、インドネシア現代美術の発展に重要な役割を果たしているインドネシア・デワタ・アトリエも含まれている。

（e）アファンディー博物館、ソノブドヨ博物館、チュメティ・ギャラリーのような多くの博物館や美術館と同様に、ジョコ・プキッのアトリエ、バゴン・クスディアルジョのダンス・スタジオ、アミリ・ヤフヤのアトリエのような個人のスタジオもまた、明らかにジョクジャカルタのツーリズムの発展を支えている。

2. 利点

上ではその一部しか紹介することができなかったが、それらの夥しい潜在力が（ジョクジャカルタにとって）様々な利点といったものを提供する。その利点が効果的に活かされることによって、ジョクジャカルタのツーリズムはいつそう促進される。これらの利点とは（a）芸術や文化における人的資源、つまり芸術家や大家などが無尽蔵に存在し、ますます偉大な街になるであろうこと。（b）文化都市とか教育都市という冠をつけることによって、ジョクジャカルタは他の地からの来客を引きつける「磁石」になること。ジョクジャカルタは何でもありの場所だ。異質なものを飲み込んでしまう容量をもっている。それゆえ、差異や複数性を祝福する機会は幅広く開かれているし、いつでも準備は整っている。（c）ツーリズムという側面から考えると、ジョクジャカルタをバリと並べて代

表的な観光の目的地と捉えることは適切である。ツーリズムには、まだ不十分で欠けている点があるかもしれないが、それでも芸術や文化の育成には大いに役立つ。（d）その他、教育とツーリズムを併用しながら、異文化との出会いの可能性を考えることができる。例えば ISI のような高等研究機関を訪れる海外からの学生や芸術家を通してである。（e）ジョクジャカルタと京都、ジョクジャカルタとロサンゼルスなど多くの都市と結ばれた姉妹都市や友好府州の条約が、ジョクジャカルタに教育、農業、文化や他の関連分野などの共同作業を促進する機会を与えている。本 COE プロジェクトによる、インドネシア芸術大学、ガジャマダ大学と大阪市立大学との間の共同研究はその一例である。我々は、都市文化に係る教育、研究他の諸プログラムを協力して遂行している。（f）PATA、WTO や EATOP といった、国内、国際プログラムがツーリズムのプロモーションを改善する機会をジョクジャカルタに与えている。

3. 弱点

これまでに述べた潜在力と好機というのは、もちろん理想の状況について言っているのであって、実際にはまだ十分に開発し、効果をあげているとはいえない。その潜在力と利点には、明らかに弱点もある。（a）地方政府のレベル2の段階で基本的な政策がつくられていない。特に芸術文化とツーリズムの相乗効果をはかることが遅れている。そのような政策は、文化ツーリズムを具体化させるのに非常に重要である。

（b）国内と国外におけるツーリズムのプロモーションがまだ弱く不適切であり、ツーリズムの意味深い必携品として芸術や文化の役割が十分に実現されず、理解されていないという事実。（c）広報関係が非常に弱く、この国に関する悪い否定的なニュースがあれば、瞬く間に広がり直ちに押し止めることができない。それによって、いくつかの国ではインドネシアへ観光客を送ることを禁ずるということも起こっている。（d）一般社会の間で文化ツーリズムの実現

に関する認識がまだまだ低い。

4. 脅威

上に述べられた弱点と関係して、潜在力と利点を徐々に蝕んでゆく脅威が出現している。

(a) グローバリゼーション、自由化、コミュニケーションという考え方である。それには、巧みな手段、競争、テクノロジーといったものが含まれ、常に発達しつづけている。この現実には避けることができない。これら全てが脅威となり、その変化し進展してゆく状況に適応できなかつたりすると、必ずや抑圧されたり摩擦を起こしてしまつたりするものだ。(b) 世界の他のツーリズムと戦つたり競争したりすることができるほどの、国内的にも、国際的にも相応しい質をもった人材を見つけることがまだ難しい。(c) テロリストによるニューヨークの世界貿易センタービルの破壊は、インドネシアのツーリズムにも危機を引き起こした。(d) この危機は、ツーリズムのための芸術文化の発展・促進を準備する資金を減少させた。

5. 政策

長所／潜在力、利点、弱点、脅威を視野に入れながら、我々は活動事項を基礎づけるいくつかの政策を考えたり、定式化したりする必要がある。そのような政策は、例えば次のようなものである。(a) 『文化ツーリズム』という地方独自の政策を形づくること。インドネシアのツーリズムを支えるための(ローカルなものから国際的なものまでの) 文化的潜在力の開発を可能にさせる。文化ツーリズム政策には法律的实施力があるという点が大変重要であり、インドネシアのツーリズムの発展に明確なアイデンティティを与えるであろう。ツーリズムを模範的に高めるための全ての運動や活動は国民的文化に基づいている。つまり、プロモーション、倫理、組織、運営、食べ物や土産などという、ツーリズムにかかわるあらゆる側面が我々の文化を担っているのである。

インドネシアのツーリズム発展施策としての文化ツーリズムは、インドネシアへの観光客を引きつけるための中心的な財産として、文化的な要素の発現を強調する。それは、例えば自然美、海岸や景色、会議やスポーツ、植物や動物、あるいは他の娯楽のような側面が無視されることを意味するわけではない。文化的な要素は、次のような大切な役割を担っている。(a) 海外と同様に国内のツーリズムも促進させること。

(b) どんな芸術や文化であっても、それらは仕事をつくり、収入を生み出す。(c) ツーリズムは、芸術と文化の旅行客を引きつけるだけでなく、芸術や文化そのものの開発を促す。(d) 芸術や文化への高い評価は記念碑的作品への敬意を促し、博物館、美術館や芸術スタジオの整備、運営を改善させる。(e) 芸術作品を売ることによって、社会を潤すことが可能となる。

(f) 他の芸術や文化との出会いは、尊厳、人間性の意味の価値把握を高める。

これらの政策を実行するために、芸術家が聖なるものを汚すことや低い価値しかもたない大量生産に頼ることを回避し、素晴らしい形を見つける必要がある。その点、インドネシアの芸術家はアメリカ合衆国から学ぶことができる。例えば『ミスサイゴン』『サンセット大通り』などの劇場作品がニューヨークの卓越した舞台芸術を生み出している。洗練された技術を駆使したこれらの作品は常に外国の観光客を引きつけている。

質の高い芸術や文化の創造に加えて、海外の大学やインドネシア研究センターのような機関を通じて、ツーリズムのプロモーションが奨励されるべきである。今日では、アメリカ合衆国の大きな大学では、ガムランの楽器や様々なインドネシアの芸術を備えている。ガムランなどのインドネシア芸術は、大学のカリキュラムの中核になっている。カリフォルニア大学ロサンゼルス校、ハワイ大学、ウィスコンシン大学、ウェスリヤン大学やコーネル大学は、アメリカ合衆国においてインドネシアの芸術を長く発達させてきた。近年、北アメリカ、ヨーロッパ、日本やオーストラリアに250以上のガムラングループが存在し、それらはインドネシア・ツー

リズムのプロモーションの一潜在力となっている。

EATOP, PATA, TRAVEL MART & SISTER CITY などにおける協力は、確実にツーリズムを国際的に促進させるための、戦略的な場になっている。そのようなプロモーションは、それに見合う資金の供給が政府からなされるべきである。それなしでは、インドネシア・ツーリズムのプロモーションの改善はないであろう。

アメリカ合衆国でのインドネシア・フェスティバル (KIAS), バンクーバー万博, 日本・インドネシア・フェスティバルなどといった海外でのインドネシアの芸術文化のフェスティバルを催そうとする政治的意思は復活されるべきである。また、国内での同様なフェスティバル, 例えば, FKY (ジョクジャカルタ芸術フェスティバル), インドネシア芸術サミット (IAS) そしてバリ芸術フェスティバルもまた、同じよ

うに開催されるべきである。これらの全てのフェスティバルは、ツーリズムや文化の促進の場だけではなく、インドネシア文化外交の手段を海外へ供給することにもなる。

ツーリズムの活動を遂行するための欠かせない人材が少ないという点からしても、ツーリズムに関する教育はすぐにでも促されるべきであり、いまこそ、ツーリズムに従事している人々が、海外に行ってマネジメントや広報, それらに類する関連分野について学ぶ絶好の機会となっている。

これは私の主要な見解に関する短い記述である。これが役に立てば光栄である。正しい実現を促す政策を設けることによって、ジョクジャカルタ特別州は長く生きながらえ、インドネシアにおいてもっとも巨大な観光客の目的地になるだろう。芸術文化の資源への正当な理解は確実に、この地域におけるツーリズムと文化の共同作業のキーとなるであろう。

Yogyakarta and Cultural Tourism

I Made BANDEM

(translated by Toshiko HAYASHI)

When discussing tourism, it is inevitable that we have to mention the name of a city: Yogyakarta. At first a question is addressed: why has Yogyakarta become interesting as a place of tourism growth and as a significant tourist destination? This question is followed by five topics to be investigated: the strengths of tourism in Yogyakarta, its opportunities, its weaknesses, its threats and policies. A cultural policy, which has not yet been well established, could be regarded as most important to enhancing cultural tourism in Yogyakarta. By establishing such a policy and pursuing the right implementation, the Yogyakarta special territory will deserve its longevity and become the biggest tourist destination in Indonesia. Appreciation of art and cultural sources will certainly become the key synergy between tourism and culture in the region.

Keywords : cultural tourism, tourism promotion, cultural policy